

プラトン『テアイテトス』第二部第五議論の帰趨

今井 知正

知識(epistēmē)の「何であるか」を問い求めるプラトンの対話篇『テアイテトス』には、「循環」もしくは「後退」と解釈される議論の箇所が二箇所ある。一つは、よく知られているように、第三部の最終議論(208b11-210a9)⁽¹⁾の最後の箇所(209e6-210a9)である。『テアイテトス』の第三部では、はじめに知識の第三定義「知識とはロゴスをともなった真なる思いである」(201c8-d1)が導入され、続いて「夢理論」の主張とそれを批判する議論がなされ、最後にこの定義をめぐる吟味と検討の議論が「ロゴス」の意味の三規定にしたがって順次展開される。そしてその最終議論の最後の箇所において、第三定義は「知識とは差異の知識をともなった正しい思いである」(210a4)との命題に言い換えられる、つまり、循環することが示され、よって成立しないと結論される。これは、定義項の中に被定義項が現われるという、純然たる定義の循環の誤りを衝く議論である⁽²⁾。もう一つは、第二部の第五議論の最後の箇所(200a11-c7)である。『テアイテトス』の第二部においては都合六つの議論が登場するが⁽³⁾、第二部のはじめに導入される知識の第二定義「知識とは真なる思いである」(187b5-6)を直接吟味し、反駁するのは最終の第六議論のみであり、それまでの五議論はこれに関わることがない。それは、知識の第二定義がわれわれの常識に基づき、真偽二様の思いの存在を前提として容認するのに対して、われわれの常識に反し、「偽なる思いはない」という、虚偽論のアポリアが現われてきて、その前提に異議を唱えるからであり(cf.187d1-6)、したがって第二部の探究は第二定義の吟味に先立って、この虚偽論のアポリアと対決せざるを得ないからである。そこで第一議論から始まり、このアポリアをめぐる議論が次々と展開される。そして第五議論に至り、このアポリアが解けたかと思われたものの、その最後の箇所においてアポリアに終る第一議論と同型の議論が登場し、しかも無限に繰り返される、つまり、議論が循環し、無限に後退することが示され、よってこのアポリアを解くことは不可能だと結論される。これは、アポリアの議論に直面し、そのアポ

⁽¹⁾ 『テアイテトス』の頁数を引用する際には書名を省略し、該当する頁数のみを記す。

⁽²⁾ 第三部の最終議論は「知識の定義の循環」という哲学上の問題を史上はじめて指摘したものと一般に解されている。だが、最終議論のテキストの具体的な読解をはじめ、その哲学的な意味内容と問題の所在、さらには『テアイテトス』全体の議論におけるその意義など、論ずべき点は多々あると言わなければならない。

⁽³⁾ 第二部に登場する六つの議論の分類は以下の通りである。

第一議論：187e5-188c8、第二議論：188c9-189b9、第三議論：189b10-190e4、第四議論：190e5-195b8、第五議論：195b9-200c7、第六議論：200d5-201c7。

リアを解こうとすると、それと同型の議論が限りなく再生産されるという、アポリアの議論の循環と無限後退の難点を衝く議論である。

さて、小論の目的はいま述べた二番目の議論、すなわち、第二部の第五議論の最後の箇所に登場する議論に焦点を当て、その議論の論理的な構造と哲学的な意味とを明らかにすることにある。ここで、この議論を「議論R」と呼ぶことにすれば、議論Rが循環し、無限に後退するということはたしかにテキストに記されている(cf.200b5-c4)。だが、議論Rがどのような手順に従い、どのような過程を経て、循環し、無限に後退するのかという、その論理的な構造については、なにもテキストに記されていないといってよい。したがって、小論の一つの目的はプラトンのテキストに記されていないこれらの欠を補い、議論Rの論理的な構造を明らかにすることにある。だが、議論Rの特徴は、それが循環し、無限に後退するという論理的なものに限られるわけではない。それどころか、議論Rはプラトンのテキストに書かれた議論の中では、初期の対話篇『カルミデス』のそれを除けば⁽⁴⁾、おそらくただこれだけが有しているとみられる特徴、すなわち、「知」(epistēmē)とともに、「不知」(anepistēmosunē)が知の対象として前提の中に含まれ、しかもこれら知と不知がともに重層化するという特徴をもっている⁽⁵⁾。議論Rのもつ哲学的な意味とはこの不知に関わるものであり、それは、循環し、無限に後退するという特徴をもつ議論Rの中で、不知が一体どのようなものとして捉えられているのかということをも明らかにすることである。そしてこれが小論のもう一つの目的、つまり、議論Rのもつ哲学的な意味を明らかにすることにほかならない。

以下の論述では、まず、虚偽論のアポリアとその議論に関する基本的な論点を幾つか取り出すことから始め、次にこのアポリアをめぐる展開される五議論のそれぞれを概観して、それらの論点を確認した後、小論の対象である議論Rについて論じ、その論理的な構造と哲学的な意味とを明らかにしたい⁽⁶⁾。

—

偽なる思いをめぐる虚偽論のアポリアとは、われわれの常識に従い、「偽なる思いはある」と主張し、偽なる思いの存在を肯定する者とわれわれの常識に反して、「偽なる思いはない」と主張し、偽なる思いの存在を否定する者とが相対立し、両者の対立に容易に結着

⁽⁴⁾ たとえば、『カルミデス』166e7-8を参照。

⁽⁵⁾ ここで、「知と不知が重層化する」とは、たとえば、「知の知」「知の知の知」とか、「不知の不知」「不知の不知の知」とかのように、知と不知が各々それ自身において、また相互の間で、階層をなす事態を指す。

⁽⁶⁾ 第一節以下の論述には下記の旧稿が前提されている。参照願えれば、幸いである。

「偽と不知(一)」『人文科学科紀要』第九十三輯(東京大学教養学部)1990年、一三九頁—一四九頁。

「偽と不知(二)」『人文科学科紀要』第九十八輯(東京大学教養学部)1993年、一三九頁—一五六頁。

がつかないことから生ずるアポリアのことである。偽なる思いは、それが偽であるかぎり、真である知と両立せず、不知の一つであるが、わたくしの診断によれば、偽なる思いをめぐる虚偽論のアポリアの根は、われわれ人間が必然的に経験する知と不知に関する非対称という事態にある。これは、知には知の自覚としての「知の知」が伴うのに対して、不知には不知の自覚としての「不知の知」が伴うことなく、それにはただ「不知の不知」が伴うのみであると表現される事態のことである⁽⁷⁾。またこれは、知をもつ者には知も、「知の知」もともに「あるもの」であるのに対して、不知なる者には不知も、「不知の知」もともに「あらぬもの」であると表現される事態のことである。そこで、もしも偽なる思いをもつ者がなにか知をもつとすれば、その知はたしかにこの者にとって「あるもの」であるが、他方、偽なる思いそのものは不知の一つであって、「あらぬもの」であり、こうしてこの者には知と不知に関する非対称の事態が成り立つことになる。これより、「偽なる思いはない」と主張する者は偽なる思いをもつ者自身の視点に立ち、その者自身が身を置く文脈に自らも身を置いて、このように主張していることが明らかになる。というのは、偽なる思いをもつ者が身を置く文脈においては、偽なる思いは不知の一つとして「あらぬもの」であり、「偽なる思いはない」と主張する者はまさにこの偽なる思いを「あらぬもの」と主張して、その存在を否定するからである⁽⁸⁾。そこで、いま、偽なる思いをもつ者が身を置く文脈を「自文脈」と名づけることにすれば、自文脈においては知と不知に関する非対称の事態が成り立つこと、そして「偽なる思いはない」と主張する者は偽なる思いをもつ者自身が身を置く自文脈に自らも身を置いて、偽なる思いの存在を否定していることが明らかになる。

自文脈においては知と不知に関する非対称の事態が成り立つが、この事態が成り立たないと考えられる文脈もまた存在する。それは、たとえば、偽なる思いをもつ者が自らの不知を自覚し、よって自文脈に身を置いていたときとは異なって、不知には「不知の知」が伴うようになり、したがって自らは不知なる者でありながら、不知も「不知の知」もともに「あるもの」となる事態が成り立つ文脈である。さらにまた、たとえば、不知なる者自身は自らの不知を自覚せず、自文脈に身を置いているにもかかわらず、その不知を見抜き、それを知っている他人にとっては、不知には「不知の知」が伴い、したがって不知も「不知の知」もともに「あるもの」であるという事態が成り立つ文脈である。つまり、これは、約言すれば、自らの不知であれ、他人の不知であれ、「不知の知」が「あるもの」としてそれらの不知に伴う事態が成り立つ文脈である。そこで、いま、このような文脈を「他文脈」

⁽⁷⁾ この「パウロ的述定」の文が表現する事態を「なにかを知っている者」や「なにかを知らない者」を主語とする日常の文で書き表わすならば、それは以下のようなになる。

「これは、なにかを知っている者は、自分がそのなにかを知っているということを知っているのに対して、なにかを知らない者は、自分がそのなにかを知らないということを知らないと表現される事態のことである。」

⁽⁸⁾ このように言うことは、「偽なる思いはない」と主張する者は、偽なる思いがその思いをもつ者にとっては「あらぬもの」であるがゆえに、その思いの存在を否定するという、いわば端的にして直截な仕方論じることを必ずしも意味するものではない。これはただこのような仕方論じることと整合的であり、またそうでなければならぬということを意味するだけである。

と名づけることにしよう。すると他文脈においては、知と不知に関する非対称の事態は成り立たず、代りに、知には「知の知」が伴うように、不知にも「不知の知」が伴う事態が成り立つこと、またこの文脈に身を置く者には知も「知の知」もともに「あるもの」であるように、また不知も「不知の知」もともに「あるもの」であるという事態が成り立つことが明らかになる。そして「偽なる思いはある」と主張する者が、自らの不知であれ、他人の不知であれ、不知の知をもつ者自身が身を置く他文脈に自らも身を置いて、偽なる思いの存在を肯定していることはもはや説明するまでもなく、明らかであろう。偽なる思いをめぐる虚偽論のアポリアとは、「偽なる思いはある」と主張する者が他文脈に身を置いているのに対して、「偽なる思いはない」と主張する者が自文脈に身を置いているという、それぞれが身を置く文脈の相違から生ずるのであり、しかも自文脈において成り立つと言われた知と不知に関する非対称の事態が自他の文脈相互の間にも成り立つことから生ずるのである。なぜなら、自文脈においては不知には「不知の不知」が伴うのに対して、他文脈においては不知には「不知の知」が伴う事態が成り立つからである。

さて、偽なる思いをめぐる虚偽論のアポリアの議論は他文脈に身を置いて、「偽なる思いはある」と主張する者と自文脈に身を置いて、「偽なる思いはない」と主張する者との間で闘わされる弁証問答として展開される。すなわち、具体的には、前者は偽なる思いの定式化を提示し、それが整合的で、矛盾なく成立するものであることを説明しようとするのに対して、後者はその定式化に異を唱え、それが矛盾していて、成立しないものであることを反論しようとするのである。ここで、前者を「説明者」、後者を「反論者」と呼ぶことにすれば、説明者が反論者に提示する偽なる思いの定式化とは、一般的に言って、次のような仮定に基づいて得られるものとみることができる⁽⁹⁾。

いま、ある事態 p が成立しており、それは命題 $(\dots \alpha \dots)$ によって表現されると仮定する。またあるひと a がおり、 a は事態 p に対して、命題 $(\dots \beta \dots)$ によって表現される事態 q が成立していると誤って思っていると仮定する。そしてこれら二命題は、前者に ' α ' が、後者に ' β ' がそれぞれ現われる以外は同一の命題であると仮定する⁽¹⁰⁾。するとこれらの仮定より、以下の式が得られることになる。

$$(\dots \alpha \dots), Ba(\dots \beta \dots) \Rightarrow Ba(\alpha = \beta) \quad \text{①}$$

①には a の思いを述べた命題が二つ含まれている。その中の最初の命題 $Ba(\dots \beta \dots)$ 、つま

⁽⁹⁾ 以下に示される偽なる思いの定式化は虚偽論のアポリアをめぐる展開される五議論の中では、第二議論を除く四議論においてひとしく適用されるものである。ただし、第二議論で提示される偽なる思いの定式化も、たとえば、拙稿「偽と不知(二)」(一四〇頁—一四二頁)で論じたように、少しばかりその表現を変えてやるならば、他の四議論に適用される定式化と一致させることが可能であり、これより五議論のすべてに適用される共通な偽なる思いの定式化が可能であるということになる。

⁽¹⁰⁾ ここで、' α ' ' β ' はともに単称名辞、またはともに述語を値としてとるメタロジカルな変項を表わすものとする。

⁽¹¹⁾ ①の中の ' $Ba(\dots)$ ' は「 a は・・・と知っている」を表わす。

り、「a は… β …と知っている」は、事態 q が成立していると思っているという、a の思いをそのまま三人称で述べた文である。いま、このような文を「純粋な報告文」と呼ぶとすれば、最初の命題 $Ba(\dots\beta\dots)$ は a の思いの「純粋な報告文」である。これに対して、二番目の命題 $Ba(\alpha = \beta)$ 、つまり、「a は α が β であると思っている」は a の思いの純粋な報告文ではなく、事態 p に対して事態 q が成立していると誤って知っているという、a の偽なる思いを a 自身に帰属させるべく、a の思いを述べた文である。いま、このような文を「帰属文」と呼ぶとすれば、二番目の命題 $Ba(\alpha = \beta)$ は a の偽なる思いの「帰属文」であり、最初の命題 $Ba(\dots\beta\dots)$ と表現上は似ているものの、その身分と出自においてはまったく異なるものと言わなければならない。そしてこの二番目の命題が、説明者が反論者に対して提示する偽なる思いの定式化にはかならない。

帰属文として表現されるこの偽なる思いの定式化には二つの大きな特徴がある。一つの特徴は、この定式化は ' $\alpha = \beta$ ' という同一性命題を偽なる思いの内容としている点である。これは、a は事態 p に対して事態 q が成立していると思っているという、先のわれわれの仮定に由来するが、関係する二つの事態 p、q の中からそれぞれ該当する二つの項目 α 、 β を取り出し、それらの間の同一性命題によって偽なる思いを表現するという、われわれの日常の言語使用ないし言語実践にこれは基づいている⁽¹²⁾。またもう一つの特徴は、この定式化は a にとっての他文脈に身を置く説明者が他文脈において措定しているという点である。勿論、最初の命題 $Ba(\dots\beta\dots)$ も、それが説明者によって措定されているかぎり、他文脈において措定されていると言うことができる。しかし、この最初の命題は a の思いの純粋な報告文であり、a にとっての自文脈に身を置く反論者も説明者と同様、自らの文脈、すなわち、自文脈において措定する命題の一つである⁽¹³⁾。つまり、a の思いの純粋な報告文は、それが説明者によって他文脈において措定されるにしろ、あるいは反論者によって自文脈において措定されるにしろ、自他の文脈の相違にかかわらず、同等に受容され、解釈されるのである⁽¹⁴⁾。これに対して、偽なる思いの定式化、すなわち、二番目の命題 $Ba(\alpha = \beta)$ は a の偽なる思いの帰属文であり、これは説明者によって他文脈において措定さ

⁽¹²⁾ これより明らかなように、①で示される偽なる思いの定式化はまったく一般的な形でなされており、したがってプラトンは『テアイテトス』第二部においては同一性命題で表現される偽なる思いしか取り上げていないという、しばしば聞かれる批判または問題提起 (e.g. J. McDowell, *Plato : Theaetetus. Translated with notes*, Oxford, 1973, pp.195, 203-204) はここでは当たらないと言わなければならない。このような見方は a の思いの純粋な報告文と帰属文の区別、さらに言えば、この区別の基にある自文脈と他文脈の区別をせずに、①の帰属文の命題 $Ba(\alpha = \beta)$ を、その表現上の同一性に惑わされて、a の思いの純粋な報告文と解するという誤解に基づいている。そしてこのような見方は、すぐ後に述べるように、実は「偽なる思いはない」と主張する反論者の見方と同じであり、奇しくもそれと一致しているのである。

⁽¹³⁾ この最初の命題 $Ba(\dots\beta\dots)$ 以外に、反論者が自文脈において措定する命題とは、前注 12 で示唆され、またこの後すぐに述べられるように、①に含まれる a の思いの二番目の命題、ただし、帰属文としてではなく、純粋な報告文として解釈されるかぎりでの二番目の命題 $Ba(\alpha = \beta)$ である。

⁽¹⁴⁾ これは、結局、説明者と反論者とはそれぞれ a にとっての人称上の他人であるという点においては同等であるということを示している。

れているものの、自他の文脈の相違のゆえに、反論者によっては自文脈において措定されることのできないものであり、aの思いの純粋な報告文のように、説明者によるのと同等に反論者によっても受容され、解釈されるということのできないものである。だが、このことは、この命題がいかなる仕方においても反論者によって自文脈において措定され、解釈されることができないということの意味するわけではない。それどころか、反論者が説明者の提示する偽なる思いの定式化に異を唱え、それに反論するためには、まさにこの命題がなんらかの仕方でも反論者によって自文脈において措定され、解釈されていなければならないのである。そしてその方法は一つだけある。それは、この命題 $Ba(\alpha = \beta)$ が最初の命題 $Ba(\dots \beta \dots)$ と同じように、aの思いの純粋な報告文として措定され、解釈されるというものである。というのも、反論者が身を置く自文脈においては、aの思いはすべて純粋な報告文として措定され、解釈されるからであり、またそれ以外に方法はないからである。その結果、この命題もまたaの思いの純粋な報告文として措定され、解釈されることになる。こうして偽なる思いの定式化である命題 $Ba(\alpha = \beta)$ は、一方で、①が示すように、aの偽なる思いの帰属文として説明者によって他文脈において措定されているが、他方で、aの思いの純粋な報告文として反論者によって自文脈において措定されるのである。偽なる思いをめぐる虚偽論のアポリアの議論とは、したがって、この表現上は同一であるが、二様の仕方でも解釈される命題 $Ba(\alpha = \beta)$ をめぐって展開される弁証の議論なのである。

二

「偽なる思いはない」という虚偽論のアポリアとその議論に関する基本的な論点が析出されたので、次にこのアポリアをめぐる展開されるそれぞれの議論を、これらの論点に焦点をしばりながら、手短に見てみることにしよう。先述したように、虚偽論のアポリアの議論は全体として五つの議論から構成されている。そして第一議論から第三議論までの三議論では「偽なる思いはない」という虚偽論のアポリアがそれぞれの仕方でも提起され、次いで第四議論と第五議論の後半部までの議論⁽¹⁵⁾では「蠟板の比喩」と「鳥小屋の比喩」を用いて、われわれの知識の成り立ちがそれぞれ説明され、アポリアの解決策が探られるが、第五議論の末尾に登場する議論Rにおいてアポリアが循環することが示されて、議論は最終的に挫折するという展開になっている。ここでは、第一議論から第五議論の後半部までの議論を概観するが、その前に、前節で析出された虚偽論のアポリアの議論の基本的な論点を改めてまとめた形で記しておく。いま、その論点を「S」と名づけることにすれば、論点Sは以下の通りである。

論点 S 偽なる思いをめぐる虚偽論のアポリアの議論とは、他文脈に身を置く説明者が、その他文脈において措定されるaの偽なる思いの帰属文 $Ba(\alpha = \beta)$ が偽なる

⁽¹⁵⁾ ここで、「第五議論の後半部までの議論」とは第五議論の全体(195b9-200c7)から議論Rを含んだ終盤の部分(199c7-200c7)を除いた部分(195b9-199c7)を意味する。

思いの定式化として矛盾なく成立すると主張するのに対して、自文脈に身を置く反論者が、その自文脈において措定される a の思いの純粋な報告文 $Ba(\alpha = \beta)$ が偽なる思いの定式化として矛盾していて、成立しないと主張するという、説明者と反論者との間で闘わされる弁証問答の議論である。

それでは、まず、第一議論から見てみることにしよう。第一議論は後の第四・第五議論にも登場するもので、五議論の中心となる議論である。だが、周知のように、議論そのものは五議論の中でもっとも短く、抽象的で、わかりづらい。その理由を論点 S に照らして述べるならば、それは、議論の一体どこまでが説明者の文脈であり、どこからが反論者の文脈であるかという、議論全体の理解にとって必須な構造上の区別ないし区分がこの議論の場合には大変見えにくくなっているという点にある。この点は、たとえば、説明者は偽なる思いの定式化としていかなるものを反論者に対して提示しているかということについて、説明者の文脈の内部ではなにも語られていないという事実に顕著に現われている。われわれは論点 S に基づき、そこに現われている自他の文脈の相違、さらには自他の文脈相互の間に成り立つ知と不知に関する非対称の事態に注目しながら、第一議論、さらには他の議論の構造と内容を捉えなければならない。

では、改めて、第一議論を見てみよう。すると、それは「知」と「不知」の二分法に基づく考察から提起されるアポリアの議論であり (cf.188c9-d1)、その構造は、前半 (187e5-188b2) が説明者の文脈、後半 (188b3-c8) が反論者の文脈となっている。前半では三つの仮定、すなわち、(A) 知と不知に関する排中律としての公理 (188a1-2)、(B) ひとの思いの対象に (A) を適用した帰結としての定理 (188a7-8)、(C) 知と不知に関する矛盾律としての公理 (188a10-b1) の三つが措定されるが、前半の内容はこれですべてである。そしてこの前半が他文脈に身を置く説明者の文脈であることは、(A)(B)(C)、とりわけ (B) において知と不知に関する対称の事態が成り立つと主張されていることから明らかである⁽¹⁶⁾。これに対して、後半では偽なる思いの定式化、すなわち、「偽なることを思うひとは、なにかあるものが別のなにかあるものであると思っている」 (cf.188b3-4) があるひと a の思いの純粋な報告文 $Ba(\alpha = \beta)$ の形ではじめて提示され、しかも同時に α 、 β の二項に (A) が適用されて得られる四通りの可能性がすべて即座に否定される。その中、二項とも「知らない」とする可能性を除く三通りの可能性は (C) によって否定されるが (188b3-5, cf.191b7-8)、残る一つの可能性は、不知は「あらぬもの」であり、よって思考の対象にならないという、自文脈における知と不知に関する非対称の事態から導かれる主張によって否定される。つまり、「テアイテトスもソクラテスも知らない者には、ソクラテスがテアイテトスであるとか、テアイテトスがソクラテスであるとかと思考することはあり得ない」 (cf.188b8-c1)、と。これは、この後半が自文脈に身を置く反論者の文脈であることを証している。

次に、第二議論に移ることにしよう。第二議論は「ある」と「あらぬ」の二分法に基づ

⁽¹⁶⁾ わたくしは拙稿「偽と不知 (一)」(一四六頁—一四八頁)において、説明者は(A)(B)(C)の三仮定を「絶対的な他文脈」において措定していると述べた。

く考察から提起されるアポリアの議論であり(cf.188c9-d1)、前半(188c9-e2)が説明者の文脈、中半以降(188e3-189b9)が反論者の文脈という構造になっている。前半では「何であれ、なにかについてあらぬものを思うひとは偽なることを思っている」(cf.188d3-4)という帰属文が偽なる思いの定式化として措定される。これに対して、中半以降では、はじめに「なにか」(ti)と「ひとつ」(hen)と「あるもの」(on)の三者の間に成り立つ含意関係が視覚・聴覚・触覚という知覚の対象の間に成り立つことが主張される。次いでこの三者の間の関係が思いの対象の間にも成り立つことが主張される。これより、「ひとつ」と「あるもの」の間の関係の対偶がとられて、「あらぬものを思うひとはなにひとつも思っていない、そしてなにひとつも思っていないひとは思っすらいない」(cf.189a10-14)と論じられ、あらぬものを思うことの不可能性が結論される。知覚や思いという志向的な文脈は内包的で、不透明だと一般に了解されているが、それがあたかも外延的で、透明であるかのように論じられるのは、反論者の文脈が自文脈であることを示す何よりの証拠である。

次は第三議論である。第三議論は「取り違い」としての偽なる思いの定式化から提起されるアポリアの議論であり、第二議論と同様、前半(189b10-d9)が説明者の文脈、中半以降(189e1-190e4)が反論者の文脈という構造になっている。前半では、その第二議論を承けて、「あらぬもの」ではなく、ともに「あるもの」としての α と β を取り違えること、つまり、帰属文 $Ba(\alpha = \beta)$ が偽なる思いの定式化として措定される。これに対して、中半以降では、まず「思う」または「思考する」とは、こころが自らを相手に沈黙の中に語ることだと規定され、次いでこのように規定される思いがいかにも $Ba(\alpha = \beta)$ の形式をとり得ないことが日常の言語使用の経験から主張され、この定式化は成立しないと結論される。ここで、 $Ba(\alpha = \beta)$ の形式をとり得ないと主張される思いとは帰属文によってではなく、純粋な報告文によって表現される思い、つまり、「内語」であり、これは、中半以降の反論者の文脈が自文脈であることを如実に語るものである。

さて、以上の三議論に対して、第四・第五議論においてアポリアの解決策が探られる。まず、第四議論では、第一議論の知と不知の単純な二分法に代えて、「蠟板の比喻」(cf.191c9)がはじめに提出され、知覚の対象や思考の内容がこころの中の蠟板の上に刻印として刻まれるかどうかによって、学習や記憶としての知および忘却としての不知の成り立ちが説明される。次いで取り違いとして把握される偽なる思いの可能性が十七通りにわたって考察され、最後の十五・十六・十七の三通りにおいて偽なる思いは視覚による再認の誤り、すなわち、誤同定として成立し、アポリアの解決策が見出されたと結論される。だが、われわれは議論の内容のみならず、その構造をも捉えなければならない。偽なる思いの可能性が十七通りに分けて論じられる箇所について言えば、それは、はじめから十四通りまでの部分(192a1-c5,d3-193b8,d10-e5)が反論者の文脈、残りの三通りの部分(192c5-d2,193b9-d9,e6-194a8)が説明者の文脈ということになる⁽¹⁷⁾。一部分、文脈が交叉し

⁽¹⁷⁾ ここで、偽なる思いの可能性が十七通りに分けて論じられる箇所について、その内容はたしかにはじめから十四通りまでの部分と残りの三通りの部分とに分けることができるとして

て、混合した形になっていることからわかるように(cf.193d10-e5)、第四議論の構造は前の三議論のそれと比べてはるかに複雑であり、‘Ba($\alpha = \beta$)’として表現される思いの文が a の思いの純粋な報告文なのか、それとも a の偽なる思いの帰属文なのかということは、当然ながら、命題の形からでは決まらず、それを肯定しているか、それとも否定しているかという、命題の置かれている文脈によって決まるのである。文脈をはじめとする議論の構造を重要視する所以である。

最後は第五議論の後半部までの議論である。この議論はアポリアの解決策として第四議論とはまた別のものを探る議論であり、前半(195b9-196d2)が反論者の文脈、中半以降(196d2-199c7)が説明者の文脈という構造になっている。前半では、偽なる思いの一つとして「 $5 + 7 = 11$ と思う」という計算間違いの例が出され、視覚による再認の誤り、換言すれば、「感覚に対する思考の取り違え」(196c5, cf.195d1-2)として規定された第四議論のアポリアの解決策がここで放棄される。だが、この計算間違いの思いは、第一議論によれば、あるひと a の思いの純粋な報告文 Ba($11 = 12$)として定式化され、これは同じ第一議論の (C)知と不知に関する矛盾律としての公理によって否定される筈のものである。すると、結局は、「偽なる思いはない」という虚偽論のアポリアを認めるか、あるいは(C)を否定して、「ひとは知っているものを知らないことも可能である」(196c7-8)という矛盾を認めるかという、ともに困難な二者択一を迫られることになる。中半以降では、「知っている」とは一体どのようなことかを説明して、この困難な状況を一挙に打開すべく、われわれのここを鳥小屋に見立てる「鳥小屋の比喻」が提出される。すなわち、ひとは鳩などの野鳥を捕獲して、鳥小屋に入れ、自由に捕らえたり、放したりすることができるように、われわれも学習して、知をこころの中に所有し、またその所有した知を今度は所持したり、捕捉したりすることができる。そこで、知を所有していることが「知っている」ことであるとすれば、「ひとは知っているものを知らないことも可能である」という、先の二者択一の一方の矛盾は成り立たない。なぜならば、「ひとが所有しているものを所有していないことは不可能である」(cf.199a7-8, c6-7)からである。また所有した知を改めて所持したり、捕捉したりするときに、それとは別の知を誤って捕獲してしまうことがある。これが「偽なることを思う」ことであり、したがって「偽なる思いはない」という、二者択一のもう一方である虚偽論のアポリアもまた成り立たない。たとえば、先の計算間違いの例で言えば、 $5 + 7$ はいくつであるかと考えて、「12 の知」を捕獲するところを、誤って「11 の知」を捕獲してしまい、その結果、「 $11 = 12$ と思う」こと、すなわち、あるひと a の偽なる思いの

も、その構造が、それら二つの部分に対応して、反論者対説明者という、対立的なものであるとの印象は必ずしも受けないと言われるかもしれない。これに対して、そのように言われる理由の一つとして、議論の主体、つまり、問答弁証の議論の主体がソクラテスとテアイテトスという「われわれ」であり、この「われわれ」はときに反論者、ときに説明者という、両者を含んだ包括的な視点と役割をもって議論のテキストに登場しているという点を挙げることができよう。とくに 192d3-193d9 の箇所においては、議論の先導役であるソクラテスが反論者の文脈と説明者の文脈の双方に、しかも 192e8-193a4 の一箇所を除けば、すべて一人称の主語として登場している点を指摘しておく。

帰属文 Ba(11=12)として表わされる偽なる思いが存在し、よって虚偽論のアポリアの方も成り立たないことが示される(cf.199a9-b5)。こうして「鳥小屋の比喻」を用いた中半以降の議論は困難な二者択一の状況を一挙に突破して、アポリアの新たな解決策を提示していると結論されるのである(cf.199b8-c4)。

三

虚偽論のアポリアをめぐる第一議論から第五議論の後半部までの議論が概観されたので、われわれは残る第五議論の終盤の部分に向かい、小論の対象である議論 R について論じなければならない。

さて、終盤の部分(199c7-200c7)は大きく前後半の二つに分けられる。議論 R はその後半(200a11-c7)に現われるが、前半(199c7-200a10)はそれを準備する議論となっている。前半では、まず、直前の議論で提示されたアポリアの新たな解決策、つまり、「知と知の間の取り違え」(199c10)という偽なる思いの説明に激しい反論が浴びせられる(199c7-d8)。これは、たとえば、先の計算間違いの例を用いて述べるならば、説明者が a の偽なる思いの帰属文として提示した命題 Ba(11=12)を反論者が自らの文脈、すなわち、自文脈において措定し、それを a の思いの純粋な報告文 Ba(11=12)として解釈するからである。というのは、a は「12 の知」を捕らえずに、誤って「11 の知」を捕らえたのであるが、反論者の解釈によれば、もしも a が「11 の知」を捕らえていながら、11=12 と思うならば、a は 11 を知らない、しかもその捕らえた「11 の知」によってまさに 11 を知らないということになり、さらに第一議論における反論と同じように(cf.188b3-6)、12 についてもまた知らないということになるからである。そこで、知と不知に関するこの逆説的で、矛盾した事態を前にして、それを回避する「妙案」(cf.199e7)とも言うべきものがテアイテトスの方から提案される(199e1-6)。それは、鳥小屋に喩えられるわれわれのころの中には、たんに「知」だけでなく、「不知」もまた措定されなければならない、われわれはあるときには知を、またあるときには不知を捕らえ、「真なることを思う」とは知を捕らえること、「偽なることを思う」とは不知を捕らえることであるというものである。要するに、先の例で言えば、a は「11 の知」ではなく、「11 の不知」を捕らえたとすれば、11 を知らないことになり、反論者の指摘する事態を回避することができるというものである。だが、われわれのころの中に不知を知と同等の資格で措定する一見素朴なこの提案はこの不合理な事態を回避するだけでなく、取り方によっては、虚偽論のアポリアそのものを解消してしまう底のものであると言えよう。というのも、この提案を字義通りに取るならば、偽なることを思って、不知を捕らえる者は自らの誤りに気づき、それを自覚して不知を捕らえるのであるから、誤りとしての不知も、よってまた「不知の知」もともに「あるもの」であるという事態が成り立つ文脈、すなわち、他文脈に身を置いており、自文脈、すなわち、虚偽論のアポリアの

要件である自文脈に身を置いているのではないということになるからである⁽¹⁸⁾。そこで、議論はこの点を明白にし、偽なることを思う者は自文脈に身を置いていると仮定して、一方では、テアイテトスの提案通り、不知を捕らえているが、他方では、自らの誤りに気づかずに、自分は知を捕らえていると思っていると仮定するのである(199e7-200a10)。よって、いま、この一方の仮定「aは不知を捕らえている」を‘Laā’⁽¹⁹⁾と、他方の仮定「aは自分が知を捕らえていると思っている」を‘Ba(La*è)’⁽²⁰⁾と記すことにすれば、これらの仮定より、以下の式が得られることになる。

$$La\grave{a}, Ba(La^*è) \Rightarrow Ba(\grave{a}=è) \quad \textcircled{2}$$

②は①の一つの代入例であり、命題 $Ba(\grave{a}=è)$ 、つまり、「aは不知が知であると思っている」という、aの偽なる思いの帰属文が帰結として導かれる。議論Rが登場する準備がこれで整ったことになる。

後半(200a11-c7)は、反論者が「かの反駁家」(200a12)と呼ばれ、命題 $Ba(\grave{a}=è)$ を第一議論と同様の仕方で否定する、つまり、この命題の \grave{a} と $è$ の二項に第一議論の(A)が適用されて得られる四通りの可能性をすべて否定することによってこれを否定するという議論から始まる。これが議論Rの始まりであり、その第一段階である(200b1-5)。これは、aの偽なる思いの帰属文として②において帰結する命題 $Ba(\grave{a}=è)$ を反論者が自文脈において措定し、それをaの思いの純粋な報告文として解釈した結果であり、第一議論および前半のはじめの反論(199c7-d8)と同種の議論である。しかし、議論Rはこれで終るのではなく、実は循環し、無限に後退することがこれに続く次の行文の中で明らかにされる。

それとも、あなたたち [ソクラテスとテアイテトス] はまた再びわたし [かの反駁家] に言うのであろうか。知と不知にはまたそれらの知があるのであって、それらの知を所有している者は先のものとはまた別のなにかおかしな鳥小屋や蠟板の中にそれらを閉じこめており、それらを所有している間は、たとえこころの中で手近かなものとして所持してはいないとしても、知っているのである、と。そしてこのようにして、あなたたちはこれ以上、何も得るものもなく、何度も何度も同じところを回って戻ってくるのを余儀なくされるのであろうか(200b5-c4)⁽²¹⁾。

上の行文はおよそ次の四つの点について述べていると言える。すなわち、第一点は、「知

⁽¹⁸⁾ テアイテトスの提案を字義通りに取るならば、偽なることを思う者は他文脈に身を置くことになるという点は、この提案では知と不知の二概念が同等の資格で、つまり、対称的に語られており、よって偽なることを思う者は知と不知に関する対称の事態が成り立つ文脈に身を置くことになるということからも了解される。

⁽¹⁹⁾ ‘Laā’の‘L’は「捕らえる」を、‘ā’は「不知」をそれぞれ表わす。

⁽²⁰⁾ ‘Ba(La*è)’の‘a*’は間接的再帰代名詞の「自分」を、‘è’は「知」をそれぞれ表わす。

⁽²¹⁾ 訳文中の [] 内はわたくしの加えた補綴である。

の知」や「不知の知」が言われているように、知や不知が重層化すること、第二点は、この重層化に伴って、鳥小屋が一箇ではなく、複数箇あるということ、第三点は、「知っている」とは知の所持ではなく、所有であるということ、そして第四点は、議論Rが循環するという点である。議論Rに関するテキストはこれですべてであり、前述したように、議論Rが循環し、無限に後退するという点はテキストに記されているが、それがどのような手順に従い、どのような過程を経て、そうなるのかという点については、具体的にはなにも記されていない。われわれは上の四点を前提とし、テキストに記されていない欠を補って、議論Rの論理的な構造をまず明らかにしなければならない。

先述のように、議論Rの第一段階は②における帰結としての命題 $Ba(a=e)$ を争点とするものである。いま、議論を具体的なものにするために、「 $5 + 7 = 11$ と思う」という先の計算間違いの例を再び取り上げることにしよう。すると、前半の議論に従えば、この計算間違いをして、偽なることを思うひと a は、一方では、「11 の不知」($11\bar{a}$)を捕らえているが、他方では、自らの誤りに気づかずに、自分は「11 の知」($11e$)を捕らえていると仮定されると仮定される。そこで、これらの仮定より、以下の式が得られる。

$$La(11\bar{a}), Ba(La^*(11\bar{e})) \Rightarrow Ba(11\bar{a}=11e) \quad \textcircled{3}$$

これより、議論Rの第一段階は、この計算間違いの例を用いて表現すれば、③における帰結としての命題 $Ba(11\bar{a}=11e)$ 、つまり、「 a は「11 の不知」が「11 の知」であると思っている」を争点とするものである。

それでは、議論Rの第二段階に進むことにしよう。第二段階では、先に引用した行文に述べられていたように、「知の知」や「不知の知」という、知や不知の重層化が起こり、またこれらを入れる新しい第二の鳥小屋が存在すると前提される。計算間違いの例を用いれば、この第二の鳥小屋の中にはすべての自然数の「知の知」や「不知の知」、たとえば、「12 の知の知」($12\bar{e}\bar{e}$)や「11 の知の知」($11\bar{e}\bar{e}$)、そして、「11 の不知の知」($11\bar{a}\bar{e}$)が入れられている。ここで注意すべきことは、第二段階に進み、第二の鳥小屋を建てる者は、当然のことながら、説明者であり、それは、あるひと a が「知の知」と「不知の知」、具体的には「11 の知の知」と「11 の不知の知」を所有することによって、②、具体的には③における二つの仮定を否定し、そうすることによって②における帰結としての命題 $Ba(a=e)$ 、具体的には③における帰結としての命題 $Ba(11\bar{a}=11e)$ を否定して、第一段階の関わる争点を克服し、それを消去するためであるということである。別の言い方をすれば、これは、第一段階では、 a は自文脈に身を置いているが、第二段階では他文脈に身を置いていると仮定され、 a は第一段階の争点である偽なる思いを第二段階ではもはやもつことがないということの意味する。では、この第二段階において、 $5 + 7$ はいくつであると a は実際に考え、答えるのであろうか。先に引用された行文の第三点が指示するように、 a はまたしても「 $5 + 7 = 11$ 」と答えて、誤るのであり、しかも誤っているながら、自らの誤りにはまったく気づくことがない。第二段階では、第一段階とは異なり、 a は「11 の不知の知」を所有して

いるのであるから、たとえ「 $5 + 7 = 11$ 」と答えるとしても、自らの誤りに気づく、つまり、「11の不知の知」を所持し、再度、計算をやり直すことも可能な筈である。しかし、 a はそれをする事もない。すると、この状況を前にして、虚偽論のアポリアの先の解決策は今度は次のように言うことになる。すなわち、 a は、先の議論で「12の知」を捕らえるところを、誤って「11の知」を捕らえたように (cf.199b1-5)、この第二段階でも「12の知の知」を捕らえるところを、誤って「11の知の知」を捕らえるのである、と。しかし、「知と知の間の取り違え」というこの解決策は逆説的な事態を招くものとして前半のはじめの反論で厳しく批判されたものである。そこで、この事態を回避すべく、テアイテトスの提案がなされる、つまり、第二の鳥小屋の中に新たな不知が措定されるのである。この場合、「11の不知の知」が a によって捕らえられていないということからも、新たに措定される不知は「11の不知の不知」(11 $\alpha\alpha$)でなければならない。こうして自らの誤りを自覚せず、自文脈に身を置いている a は、一方では、「11の不知の不知」を捕らえているが、他方では、自分は「11の知の知」を捕らえていると仮定されていると仮定されるのである。したがって、これらの仮定より、以下の式が導かれる。

$$La(11\alpha\alpha), Ba(La^*(11\epsilon\epsilon)) \Rightarrow Ba(11\alpha\alpha = 11\epsilon\epsilon) \quad \textcircled{4}$$

これより、④における帰結としての命題 $Ba(11\alpha\alpha = 11\epsilon\epsilon)$ 、つまり、「 a は「11の不知の不知」が「11の知の知」であると思っている」が第二段階の争点である。そして第一段階と同じく、この第二段階においても、説明者が a の偽なる思いの帰属文として提示するこの命題を反論者は a の思いの純粋な報告文として解釈し、第一議論と同様の仕方でこれを否定するのである。こうして第二段階においても第一議論と同型の議論が登場し、アポリアの議論が循環することが明らかになる。

さて、議論Rの第三段階とそれ以降の段階は、知と不知の重層化が一階ずつ増え、それらを入れる鳥小屋が一つずつ建て増しされ、議論の争点となる命題の表現がこれらに対応して変化する⁽²²⁾という以外は、議論の手順や形式に変化はなく、議論は同じ過程を無限に繰り返すことになる。ここで、ようやく、われわれは議論Rの論理的な構造について語る事ができる。つまり、議論Rの論理的な構造とは何かと云えば、それは次のようなものである。すなわち、説明者による知と不知の重層化と鳥小屋の建設に始まり、計算間違いを一例とする偽なる思いの定式化としての命題が提示され、それが争点となって、反論者によるその命題の否定に終るという過程が循環し、無限に繰り返されることである、と。形式的に言えば、これは、第二節の冒頭で述べた論点Sが循環することである。

議論Rの論理的な構造が明らかにされたので、われわれは次にその哲学的な意味について考えてみなければならない。いままでの論述からも明らかのように、虚偽論のアポリア

⁽²²⁾ これは、先の計算間違いの例を用いれば、第 n 段階での争点となる命題が「 $Ba(11\alpha \dots \alpha = 11\epsilon \dots \epsilon)$ 」と表現され、この中で「11」の後に「 α 」と「 ϵ 」がそれぞれ n 箇連なるということである。

をめぐる議論Rは、他の議論と同様、説明者と反論者のそれぞれが身を置く文脈の相違、すなわち、自他の文脈の相違から生じてくる。ここで、自他の文脈の相違とは、無論、知と不知に関する非対称の事態が自他の文脈相互の間に成り立つことを意味するが、このこと自身は、他文脈においては知と不知に関する対称の事態が成り立つのに対して、自文脈においては知と不知に関する非対称の事態が成り立つということから生じてくる。すると虚偽論のアポリア一般、そして議論Rにとっては、知と不知に関する非対称の事態が自文脈において成り立つことがその要因であり、さらに言えば、この非対称の事態そのものを惹き起こす自文脈における不知のあり方がその決定的な要因であるということになる。なぜならば、自他の二文脈における都合四つの知と不知の中で、この自文脈における不知のみがある事態を惹き起こすからである。それは、すなわち、そのものには、そのものの知が伴うことなく、そのものの不知が伴うのみであるという事態、あるいは、そのものをもつ者には、そのものも、またそのものの知もともに「あらぬもの」であるという事態のことである。したがってわれわれは、議論Rの中でその決定的な要因となる不知がどのような場面で、またどのような仕方で現われ、一体どのようなものとして捉えられているかということをも明らかにしなければならない。

不知が議論Rの中でそれとして現われる場面は三つあるように思われる。一つは、テアイトスの提案がなされる場面、つまり、各段階において新たな不知がかの逆説的な事態を避けるためにその段階の鳥小屋の中に措定導入される場面である⁽²³⁾。この場面では、たとえば、計算間違いをして偽なることを思うひと a は自らの誤りに気づかずに、自文脈に身を置いており、したがって説明者によっていわば外から新たに導入される不知は a にとって「あらぬもの」であり、それは、a が捕らえたというよりも、説明者によって捕らえさせられたと言うべきものである。もう一つは、先に引用した行文の第一点と第二点が述べているように、知と不知の重層化と鳥小屋の建設がなされる場面、つまり、各段階のはじめにおいて新たにさまざまな種類の「知の知」と一つの「不知の知」がその段階の鳥小屋の中に措定される場面である⁽²⁴⁾。この「知の知」と「不知の知」の措定は、先述したように、第二段階以上の各段階においては、その一つ前の段階で争点となった偽なる思いをその段階にいる a はもはやもつことがないということの意味する。そして「不知の知」の存在が明示しているように、a はこれを所有することによって他文脈に身を置くことになり、したがって一つ前の段階で、たとえば、計算間違いをし、その誤りに気づかないことによって自らが身を置いていた自文脈から他文脈へ移るといふ、文脈の移行ないし転換を行っているということになる。換言すれば、説明者は自らの誤りを自覚せず、自文脈に身を置いてある a を反論者の手から取り戻すべく、各段階のはじめにおいて知と不知の重層

⁽²³⁾第 n 段階において新たに措定導入される不知とは、先の計算間違いの例を用いれば、‘11a…ā’ と表現され、‘11’ の後に ‘ā’ が n 箇連なったものである。

⁽²⁴⁾ 第 n 段階において新たに措定される一つの「不知の知」とは、先の計算間違いの例を用いれば、‘11a…āè’ と表現され、‘11’ の後に n-1 箇の ‘ā’ と 1 箇の ‘è’ が連なったものである。

化と鳥小屋の建設を新たに行うのであるとすることができる。そしてもう一つは、勿論、aが所有している知を捕らえずに、誤りを犯し、その誤りに気づかない場面、しかも第二段階以上の段階においては、その誤りに気づくべく所有している「不知の知」を捕らえずに、それにも気づかない場面、つまり、aが二重の意味での不知の誤りを犯す場面である。aはこの誤りによってこの種の不知が惹き起こす事態、すなわち、先程述べたかの事態が成り立つ文脈、すなわち、自文脈に再び身を置くことになり、各段階のはじめに自らが身を置いていた他文脈から自文脈へ移るといふ、文脈の転換を行うことになる。こうして議論Rの示すところによれば、偽なることを思うひとaは自他の二文脈の間をちょうどジグザグ状に上昇しながら、往復する運動を無限に繰り返すことになる。するとこの二重の意味での不知が三つの場面に現われる不知の中では議論Rにとってもっとも重要で意味のあるもの、すなわち、その決定的な要因であることは言を俟たないであろう。よってわれわれは次のように言うことができる。すなわち、議論Rの中では、不知はこの二重の意味での不知として捉えられ、第二段階以上の各段階において他文脈から自文脈への文脈の転換をもたらす、そうすることによって議論Rの循環そのものを生起させる決定的な要因として捉えられている、と。そしてこれはまた議論Rのもつ哲学的な意味にほかならない。

後記

本論文は「ギリシャ哲学セミナー」第九回共同研究セミナー（2005年9月10日－11日、於東洋大学）で口頭発表した原稿に加筆と修正をほどこしたもの（『哲学・科学史論叢』第八号（東京大学教養学部哲学・科学史部会）2006年所収）にさらに若干の修正をほどこしたものである。なお、発表に際しての質疑応答とその後の議論において有益な批評および批判を下された会員諸氏の方々に、この場を藉りて、感謝申し上げます。

さて、発表の際にいただいた質問は、その内容を要約して記すならば、以下の五項目にまとめることができる。

- 1) 偽なる思いの定式化とその一般性
- 2) 議論Rにおける階層化・重層化の意味
- 3) 議論Rの無限後退の論理的な構造
- 4) 虚偽論のアポリアの議論と知識の第二定義との関係
- 5) 虚偽論のアポリアとソクラテスにおける不知の自証の意味

これらの中には、本論文や注(6)で挙げた拙稿の中ですでに答えが述べられている項目もあ

れば(たとえば、1)と2))、そうでない項目もあるが(たとえば、5))、ここでは、とくに3)の項目について少しく触れておかなければならない。というのも、3)は野村光義氏から寄せられた質問であるが、当日の質疑応答においては質問の意味や内容を十分に把握することができず、したがって的確な答えを述べることのできなかつたものであるからである。その後、野村氏は質問の内容を「偽なる思いと高階の鳥小屋」という小論文にまとめられたので、わたくしの大学院の授業に来ていただき、それを一緒に検討する機会をもった。その結果、議論Rの無限後退の論理的な構造については、氏の理解はテキストにも自然であり、論理的にも整合的であることが明らかとなった。そこで、氏が近い将来にこの小論文の内容を何らかの形で発表されることを希望するとともに、わたくし自身、改めて、議論Rの論理的な構造が全体としてどのようなものになっているかという点を探らなければならないと、現在、考えているところである。